

現代アボリジニ社会の成立

——人口学的視点から——

小 山 修 三

伝統的部族社会が西洋文明国家と対峙したとき、人口が減少し、社会崩壊がおこり、文化的活力を失い、絶滅あるいは衰退する現象は近代世界史にみられる一つの普遍的パターンである。オーストラリア大陸の原住民、オーストラリア・アボリジニもそのような例の一つである。

1788年オーストラリアが英国の植民地となって以来、アボリジニ社会は急速に崩壊していった。1960年代までのアボリジニ社会は都市部で白人との混血がすすんだ結果、アボリジニとしてのアイデンティティを失しかけていた集団と、遠隔地で白人セトルメントに寄生して、伝統を失いつつあった純血集団にわかれていた [Rowly 1970]。両者ともその現状は暗く、アボリジニが人種として滅亡することはないとしても、その社会は本来の伝統とはまったく関係のない、オーストラリアの最下層の白人と同じものになるだろうという見方が一般的だったのである [Meehan & Jones 1980]。

しかし、1970年代になってアボリジニ社会に突然、予想外な動き—それまでの都市やセトルメントへの集中化とは逆の分散化 (decentralization) —がおこった。遠隔地のアーネムランドで、人びとがセトルメントをはなれ、自分たちの領地にむら (outstation) をつくって狩猟採集を中心とした伝統的な生活を営みはじめたのである。この動きは中央砂漠地帯、西オーストラリア州などへと急速にひろがっていった。この動きはアウトステーション運動 (outstation movement) とよばれ、アボリジニ社会の復興につながる自立的社会運動として注目をあび、その後都市部の混血アボリジニ集団にも大きな影響をあたえることになった。

本論文ではオーストラリア・アボリジニ社会を人口という視点からとらえ、その時代的変動をとうしてアボリジニ社会の崩壊と復興のプロセスを考えることにしたい。

I 人口の変動

オーストラリア・アボリジニの人口変動は時代的に大きく三期にわけることができる。第一期はオーストラリアが植民地化される前の先史および原史時代の自然期、第二期は1788年から1920年代までの減少期、第三期は1920年代から現代の回復期である (表1, 図1)。

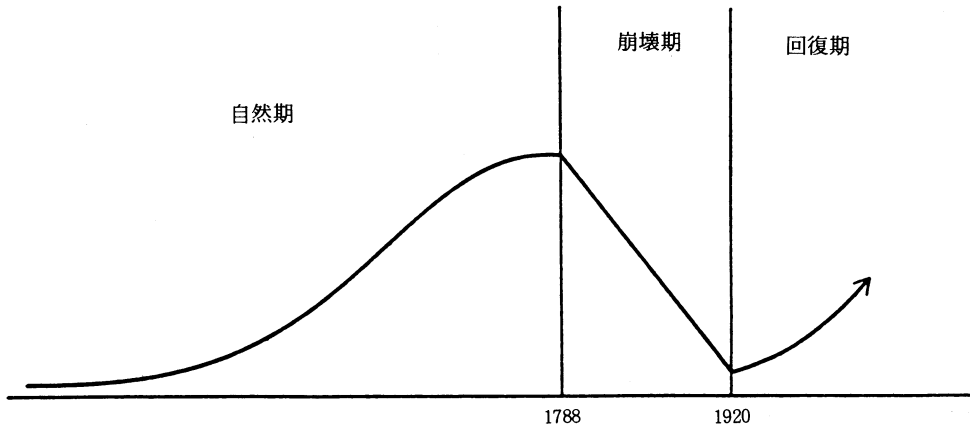


図1 人口変動の模式図

表1 アボリジニの人口推移

州	年	1788 ¹⁾	1901 ²⁾	1921 ³⁾	1947 ⁴⁾	1966 ⁵⁾	1981 ⁶⁾
ニューサウスウェールズ		40,000	8,065	6,067	11,560	13,613	37,758
ビクトリア		11,500	521	573	1,277	1,790	9,087
クィーンズランド		100,000	26,670	15,454	16,311	19,003	35,664
南オーストラリア		10,000	3,070	2,741	4,296	5,505	9,476
西オーストラリア		52,000	5,261	17,671	24,912	18,439	30,749
タスマニア		2,500	0	0	214	55	2,544
ノーザンテリトリー		35,000	23,363	17,973	15,147	21,119	28,680
首都特別区 (ACT)		—	—	0	100	96	755
計		251,000	66,950	60,479	73,817	79,620	154,713

1) *Official Year Book of the Commonwealth of Australia* No. 23 (1930) に載せられた Radcliffe-Brown による推定値

2) *Official Year Book of the Common Wealth of Australia* No. 1 1901-7から作成

3) *Official Year Book of the Common Wealth of Australia* No. 17 1924

4) *Statisticians Report on the 1947 Census*

5) *Census of the Commonwealth of Australia* 1966

6) 1981センサスに対する E. K. Fisk の訂正值

A. 自然期 (40,000 年前—1788)

オーストラリア大陸には少なくとも 40,000 年前にアボリジニの祖先と目される人類が存在していた [Kirk 1984]。その後、彼らは採集経済の段階にとどまりながら、大陸各地の変化にとんだ環境に適応していった。イギリスの植民が始まった 1788 年の時点での人口をラドクリフ・ブラウンは約 251,000 と推定している [Radcliff—Brown 1930]。大陸全体の人口密度は 0.03 人/km² である。これに対しティンデル [Tindale 1960] は約 30 万、バーゼルは [Birdsell 1970] 約 80 万という人口を提言している。人口の分布についてはティンデルの部族地図によるとクィーンズランド州から、ニューサウスウェールズ州の海岸線にそってはその東部大分水嶺山脈の森林地帯や北部海岸地帯は人口密度が高く、中央砂漠部では低いなど地域によって大きな差がみられる (図2)。



図2 オーストラリア・アボリジニの部族領域

自然期のアボリジニは単に自然環境に適応するのではなく、火を放って森を焼きひらき生産力をあげるという技術をもっていた。今日の砂漠や北部海岸地帯の疎林などの環境はその結果にほかならないという [Jones 1969]。しかし、考古学資料によると物質文化の発達および変化はほとんどみられない。たとえばこの大陸には弓矢はついにあらわれることがなかった。これは後氷期にオーストラリア大陸が成立して以来、他地域との文化的な交流がほとんどないという地理的な孤立がそのもっとも大きな原因の一つであろう。

技術レベルが低く、他文化からの刺激のほとんどない採集社会での人口動態は長い年月のなかで人口量がゆっくりと増加し、自然環境との均衡状態ができあがったあとと安定することが予想される。オーストラリア大陸の地形は氷河期以来変化が大きかったが、沖積層の形成をふくめ現在のかたちになったのは約 6,000 年前の海進期以後のことである。またオーストラリア大陸に現代アボリジニの物質文化につながる石器文化が定着したのが約 5,000 年前である [Mulveny 1975]。したがって、B.C. 3000 年前後に狩猟採集社会として環境と調和

のとれた人口量（少なくとも25万）があったことが予測されるのである。

B. 崩壊期（1788—1921）

1901年にオーストラリア政府によってアボリジニをふくむ最初の人口統計がだされている。この時のアボリジニの人口は約六万で当初の20%にすぎない。年増加率でみるとマイナス1%というすざましい崩壊ぶりである。

人口変化を地域別にみていくともっとも目をひくのはタスマニア島で、1863年に純血の原住民が全滅している。開拓がはじまってから80年たらずの期間であった。タスマニアでは最初の四半世紀のうちに利用可能な土地がほとんど農牧地にかえられ、逃げ場のない小さな島の狩猟採集民は急速な滅びの道を行っていった。この島では開拓のために自由人一人あたり五人の囚人をあたえられ、労働力は充分であった。そのため他州のように原住民を労働力としてくみこむ努力はされず、開拓者は領土を奪うだけでなく、原住民をみれば撃ち殺すという害獣と同じ扱いをした。したがってタスマニアでの集団虐殺、暴行、環境破壊などの記録は枚挙にいとまがない。原住民に加えられた保護の記録も少しはあるが、結果的にはなんらの効果を生まなかったというべきであろう。

この間、本土でも開拓の進行はタスマニア以上にはよい速度で進行しており、アボリジニ人口の減少は1920年代までつづいた。州別にみると、開拓の先進州であるビクトリア州はほぼ全滅状態で95%減、ニューサウスウェルズ州では85%減、クィーンズランド州は85%減（減少の比率はもっともたかい）という激減ぶりである。ついで南オーストラリア州は73%減、西オーストラリア州は66%減となっており、比較的になかったのはノーザンテリトリーの34%減であった。

C. 回復期（1921—現在）

アボリジニの人口は1920年代から反転して増加期にはいる。全体の増加の様子は1960年まで年率0.01%のゆっくりした増加であった。しかしその後は急速な伸びになって81年にいたる。州別にみるとその傾向が激しくあらわれるのがニューサウスウェルズ州、クィーンズランド州、西オーストラリア州である。まず、ニューサウスウェルズ州では1921年から81年までの60年間に人口量は6.2倍に増えるのだが、40年代まではやや高い伸びをしめし、その後60年代まで伸びは停滞気味となり80年代にむかって急増する。60—80年代のクィーンズランド州もほぼ同様の曲線をしめすが、この州の北部はヨーク半島を中心とした遠隔地のアボリジニの多い地域があり、人口の母数がもともと大きかった。そのため実質は2万人の増加だが、率としてはニューサウスウェルズ州ほどではない。西オーストラリア州は20年代から伸びた人口が40年代から60年代にかけて減少する。その原因の一つは1949年の推定数が大きすぎたためだと言われている [Jones 1970]。66—81年の伸びは年率3.4%

と前二者ほどではない。南オーストラリア、ビクトリアの両州は20年代の母数が小さいため伸びが低調である。しかしビクトリアでは約16倍という大きな増加で、倍率でニューサウスウェルズ州を上まわっている。

II 人口の崩壊と復興の原因

A. 崩壊の原因

狩猟採集経済のアボリジニ社会の基本的生活単位は数家族を中心とした数十人構成員からなる「ホルド」である。さらにそれがあつまって100～2,000人の規模の部族をつくる。しかし、この部族は言語集団とよぶべきもので、政治的なまとまりをもつものではない。このような社会規模の小ささと組織の脆弱さが白人文明との接触の衝撃に対して弱かった第一の原因としてあげられるだろう。

第二に狩猟採集民のもつ独特の行動パターンがある。彼らは資源が豊富に産する土地に常に集まり、その供給が充分であるかぎりそこに滞在する。ふつうの状態では季節的な変動があり、期間的にも短い。ところが開拓者のキャンプのまわりには小麦粉、砂糖、茶、牛肉、衣料のほか彼らのもっとも好むタバコとアルコールまでがほぼ常時存在する。したがって白人の所在地は彼らにとってもっとも豊かな狩場であり採集地にほかならなかった。その結果、彼らは本来の活動をせず寄生生活をすることで充足することになり、そのため放置された狩場や採集地の生態系が乱れ、生産力がおちるという結果をまねいた。

第三にもっとも致命的であったと考えられるのは、狩猟採集社会のもつ人口量と環境（人口支持力）の間にある人口学的メカニズムである。たとえば気候変動や災害があると、食料の供給は激減する。その結果、人びとの栄養状態が極端にわるくなり、人口崩壊の危機がおこる。それをふせぐために人口量は常に低くおさえられているのである。しかし人口の絶対量の少なさはその母数が損傷を受けたとき、回復力が鈍いという弱点をもっている。白人との接触はそのようなメカニズムを一挙につきくずしてしまった。開拓民がもちこんだ結核、はしか、天然痘、梅毒などの流行性の感染症が猖獗をきわめたことはその一例である。

B. 回復の要因

それでは人口回復はどうおこなわれたのであろうか。1921年にアボリジニ人口は最低値をしめた。つまり1910年代の後半から20年代前半の期間はオーストラリア大陸でアボリジニという人種が絶滅するか再生するかの重要な時期だった。しかし1921年以降人口は急速に回復にむかうということは、アボリジニ人口の崩壊をおしとどめるような外的、内的条件（precondition）がこの頃できあがったと考えてよいだろう。

1) 外的条件

人口が回復にむかった第一の条件はアボリジニ保護のための政策がととのってきたことであろう。イギリスの植民地統治政策は原住民を入植者の労働力としてくみ入れ、文明と宗教（キリスト教）を習得させるという名目をかかっていた。ただしそれは「たてまえ」で、まず優先されるのは入植者の人権、財産、信条であり、それが危険にさらされた場合は「たてまえ」は簡単に無視された。原住民に対する掠奪、殺人などの暴力が横行したのはそのためである。

しかし法的に定められたアボリジニ保護の措置は後手にまわりながらも次第に整備されていった。たとえば1837年には原住民委員会（Select Committee on Aborigines）がつくられ、この頃ようやく明らかになってきたアボリジニ社会の惨状に対応するためそれまでの警察による統治をやめて、キリスト教宣教師をこれにあて、アボリジニの文明化をすすめるべきであるという意見を答申している。これによってアボリジニ行政は警察の力による支配から、人道主義的な宣教師の手にうつされ新しい局面をむかえることになる。

1839年になると最初のアボリジニのためのミッション（Buntindale Mission）が設立され、1840年代になるとへき地にこのようなミッションをたてることがさかんになった。各地のミッションからの報告が集まるとアボリジニ社会がいかに悲惨な状態にあるかがますます明確になってきた。そこでミッションはセツルメントをつくり、その周辺を保護地区とし、白人を排除し、農業や牧畜を導入してアボリジニの自立をめざした活動を展開していった。

このようなミッション活動は一方でキリスト教徒を中心とする都市部の中流層インテリにアボリジニ保護を求める人道主義的な救済運動をひきおこした。この運動には、オーストラリアの人類学者も加わり物質文化にとぼしい、そのため未開、劣等という野蛮人のイメージに重なるアボリジニ社会が実は親族組織や神話、絵画、彫刻などに独特で高度な発達をみせていること、その生活は自然と調和のとれた合理的なものであることなどと発言し、アボリジニのもつ豊かな人類の文化遺産を絶滅させてはならないのだと世論にうったえたのである。

キリスト教徒と人類学者がつくりあげた世論の最大の業績としては、ノーザンテリトリーを連邦政府の直轄地とし（1863年）、アーネムランド、中央砂漠、キンバレー地方の大保護区（reserve）を設立させた（1920年）ことがあげられるだろう。それはメルボルンで開かれた進歩的政治家、教会指導者およびリンネ学会員などで構成されるオーストラリア・ニュージーランド科学振興会議（Australian and New Zealand Association for the Advancement of Science）の勧告にもとづくものであった。広大な地に白人文化の影響が少ない伝統的アボリジニ社会が残ったことはその後のアボリジニの人口と文化の復興への大きな礎となったのである。

2) 内的条件

1921年を境に上昇にむかった人口増加の人口学的要因をみるためにアボリジニを純血アボリジニ（full blood）と混血アボリジニ（half caste）というカテゴリーに分類してみるこ

にする。両者には増加率に大きな差があり、1920年から61年の時点では、前者は20～25%程度の減少であるのに対し後者は238%というおおきな増加をしめす [Jones 1970]。この事実はいわゆる混血アボリジニが「生産性の高いポピュレーショングループ」として1920年前後に成立したことを示している。混血アボリジニは、主として都市部に住み、保護区のアボリジニのように、政府の保護をあたえられることなく、白人との接触の結果自然に成立したあと、みすてられたかたちで社会経済的に白人社会の最下層にくみ入れられていったのである。

混血集団は単一民族としての集团的拘束力がなく、他の民族集団との間の婚姻と再生産の枠がとりはらわれており、実態の把握が困難である。とくにアボリジニの場合は人種差別という社会的制限によってセンサスごとに、実数がしばしば大きくずれている。

混血アボリジニの年令構成について1961年のセンサスにもとずいてジョーンズは白人もふくめた全オーストラリア (All Australian), アボリジニ (Aboriginal), 混血アボリジニ (half-caste) 人口の年令構成の対比表をつくっている (表2)。これによるとオーストラリア全体の人口構成の比率は若年層が比較的低く、高年令層が高い、細長い三角型をつくるのに対し、混血アボリジニでは若年層が高く、年令があがるにしたがって急速に率が小さくな

表2 アボリジニおよびオーストラリア人の年齢構成

年齢集団 (歳)	Half-Caste	Aboriginal	All Australian
0—14	51.1	38.2	30.2
15—29	24.0	24.2	20.6
30—44	14.0	18.5	20.8
45—59	7.2	11.4	16.1
60+	3.7	7.7	12.3
計	100.0	100.0	100.0
年齢中央値	19.6	22.6	29.4

[JONES 1970] による。

るといふ、裾野のひろいピラミッド型をとる。アボリジニ全体 (full blood と half caste アボリジニの合計) の年令構成をみると中間的だがやはり前者のピラミッド型にちかい。オーストラリアは全体としては先進国型であるのに対し、混血アボリジニは発展途上国

型に特徴的なかたちになっている。

Ⅲ ノーザンテリトリーの状況

ノーザンテリトリーは現在でもまだ州としての形をとっていない行政区であることがしめすように、他の地域と異なった歴史的経緯をもっている。

この地域は一般に純血のアボリジニ人口が卓越しており、伝統的なアボリジニ社会が強く残っている。したがってこの地域のアボリジニ人口の動態は他の地域とほぼ同じであるが、その変化に時間的なずれがみられる。

ノーザンテリトリーは19世紀後半にダーウィンを首都として連邦政府直轄地として成立

した。その結果それまで隔離されていたアボリジニ社会は突然、激しい開拓の波にさらされることになった。時代的には、このころすでにタスマニア州、ビクトリア州では原住民社会はほぼ全滅していたのである。その後 1921 年までにアボリジニ人口は当初の 33% に減少しており、人口減少の速度ははやかった。その原因は開拓にかかわる技術の進歩、とくに鉄道、電信などの交通、通信手段の発達によるものだと考えられる。しかし、通信の発達は同時に、この地におけるアボリジニ社会の士気の低下や劣悪な生活の実状を南部の中流階級層に克明に伝えることになった。その結果、人道主義的なアボリジニ保護運動がおこり、保護区が設定されアボリジニの伝統社会がかろうじて保たれたことはすでにのべた通りである。

ノーザンテリトリーのアボリジニの人口が上昇に転じるのは 1950 年代からで、南部の都市アボリジニ社会と比べて約 30 年おくれている。しかし、保護区を中心とした伝統的なアボリジニ社会が、このような状況のなかで、次章にのべるような回復のための人口学的条件をととのえたことは注目にあたいする。

A. 伝統社会の再生への外的条件

伝統社会の人口回復の原因も外的要因すなわち政府による保護政策によってきっかけがあたえられた。とくに 1960 年代からはじまった連邦政府の積極的なテコ入れによって、永年放置されていた差別的な法律や社会的条件が次々と改善されている。その第一が、1951 年、連邦政府と州政府によるアボリジニ同化 (assimilation) 推進策の承認 [マドック 1986] である。

1950 年代の中頃からアメリカ、カナダを中心におこった少数民族の自立運動とこれを支持する国際世論 [Peterson 1981] が高まっていた。それをうけて進歩的な労働党政権は福祉の強化策をおしすすめていった。この頃改正された法律のうち重要なものとして、1964 年の社会福祉令は他の人種との性関係ならびに人種にかかわる制限をとりのぞき、1966 年の調停仲裁委員会によるノーザンテリトリーの牧畜業にたずさわるアボリジニへの完全賃金支払いへの裁定は他の国民と同じ平等賃金を保証する道をひらいた。また 1968 年の国民投票 (referendum) はすべての州でアボリジニが国民として登録することをきめ、アボリジニにも老人、寡婦、身体障害等の社会保障をうける権利をあたえた。1973 年にはアボリジニ省 (Department of Aboriginal Offices) が設立され、これらの法の実施を監視、円滑化した。1960 年代に連続しておこった旧法の廃止や改正と新立法によって伝統的アボリジニ社会の人びとはようやくオーストラリア国民としての権利をあたえられる。なかでも社会保障 (Social Security) の適用によって最低限度の生活をおくるための現金支給をうけるようになったこと、つまりアボリジニ集団が現代貨幣経済の体制に編入されたことが大きな意味をもっているのである。

B. 内的条件

このように外的条件として経済的な基盤が成立したころ、伝統的なライフ・スタイルにかえろうとする社会復興のためのアウトステーション運動がおこった。この運動のおこった頃にいち早く調査をおこなったクームスは〔Coombs 1978〕その原因を次のようにのべている。第一の理由は領地、土地に帰着するものであった。それらは「自分の領土は自分で管理、運営にあたるべきである（白人にいつもボス面されるのはいやだ）」、「先祖の地への儀礼的責任およびノスタルジア」、「環境への不適応（たとえば海洋民が内陸のセツルメントに強制的に入れられ、そこでの狩猟採集活動に興味をしめさない。他の部族の地にあるセツルメントに入ったため活動ができない）」、「土地所有権法への関心（鉱山使用料への利害と期待）」などというものである。

第二はセツルメントに集まった結果、社会規模が大きくなりすぎ、適応に困難を感じはじめたことである。「言語が多すぎて、英語が共通語になった（自分の言語がしゃべれない）」、「他部族に対する疑惑、敵意（病気や死は呪術によっておこると考えられており、それが仲のわるい他部族によっておこなわれると信ずる）」、「青少年のしつけ、教育が乱れた（長老のいうことをきかない）」等の理由がある。

第三は白人対アボリジニ関係である。「白人がなにを考えているかわからない（経済観—白人は互惠制原理がわからない、権利と義務に対する考えがまったくちがう）」、「アルコール、ガソリン（シンナー遊びのようなもの）など白人は有害品をもちこむ」などの理由がある。これら三つの理由により、彼らはセツルメントをはなれ祖先の地にかえり、自分たちだけの社会をつくらうとするのであるとのべ、アボリジニ社会の中から初めて勃興してきた自律的な動きとして高く評価している。

IV 自立した社会の組織

A. 新しい社会組織の成立

アウトステーション運動は1972年に誕生した労働党政権によって積極的に制度化されていった。その過程をわたしの調査したアーネムランドを中心にのべてみよう。ここでは四輪駆動車やモーターボートの購入、道路、簡易飛行場（air strip）、無線電話、上水道、家屋、学校の造成や建設、さらに産業・美術工芸振興費のための資金が比較的潤沢に投入された。セツルメントにはその受け皿として自治組織と実行機関がつくられ、土木建設、クラフト・センター、マーケット、および食糧および社会保障金の配達などのサービスネットワークをととのえていった。1984年の段階では約一万人のアボリジニが西のダーウィン、東のノロンボイの二つの都市を中心に13のセツルメントとその各々に附随する116のアウトステーションに組織されている（表3、図3）。

表3 アーネムランドにおけるアウトステーションの人口と構造

セ ン タ ー	アウトステー ションの数	活 動 範 囲 (平均値)	総 人 口	アウトステー ション人口
(東 部)				
ア ン グ ル ル	6	12.5	945	163
ガ リ ウ ィ ン ク	12	52.0	1,678	113
ナ ン ブ ラ ワ	4	77.5	427	85
ラ マ ン ギ ン グ	4	11.5	363	104
ウ ン バ ク ン バ	5	30.0	455	105
イ ル カ ラ	11	130.0	1,422	468
ガ プ ウ ィ ヤ ク	9	53.0	581	161
ミ リ ン ビ ン ギ	8	15.0	1,021	221
小 計	59		6,892	1,420
(西 部)				
マ ニ ン グ リ ダ	26	30.0	1,242	631
ミ ン ジ ャ ラ ン グ	5	29.0	307	57
オ ー エ ン ペ リ	18	92.5	848	345
ジ ャ ビ ル	8	53.0	—	169
ウ ル ウ イ	0	—	258	—
小 計	57		2,655	1,203
総 計	116		9,547	2,622

[DAA 1984] により作成.

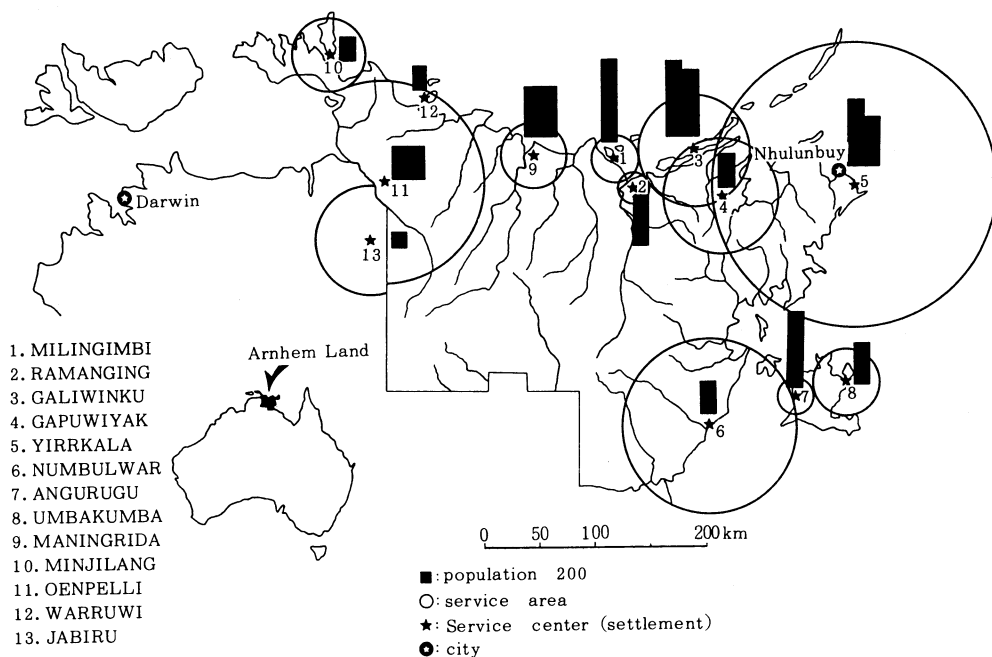


図3 アーネムランドのセツルメント

B. 再構成された社会の人口

表4 マニングリダとそのアウトステーションの人口構成

年 齢	アウトステーション		マニングリダ		全 地 域	
	男	女	男	女	男	女
0—14	165	166	159	111	324	277
15—59	77	73	156	148	233	221
60以上	73	76	25	15	98	91

[DAA 1984] により作成。

アウトステーション運動のなかで、人口はどう再構成されているのだろうか。1982年度の資料によってアーネムランドのセツルメントの一つであるマニングリダを例にとって、その年令構成をみるとセツルメントとその周辺に散在するアウトステーションの間で前者は成人層が突出するが、後者は成、老年層がほぼ同率という奇妙なかたちをとる。しかし、地域全体としては健全なピラミッド型になっている（表4）。

アウトステーションの形成の中で彼らは定住的な居住形態をとらず、遊動（nomad）的である伝統を残し、食糧の確保や医療、教育、レクリエーションなど、必要に応じてアウトステーションとセツルメント間を動くことでセツルメントの機能をうまく利用している。しかし、近代設備のととのったまちの生活はやはり魅力的なもので東部アーネムランドのガリウィックではセツルメントに常住し、週末や休日にアウトステーションにでかけて狩猟採集生活を楽しむという人口の再集中があらわれている [杉藤・窪田 1987]。このような現象はアボリジニ社会が社会保障金と援助金によって現代の物質文化のうえで、伝統的な社会形態を適応させた近代狩猟民社会とでもよぶべき社会をつくりあげつつあるといえるだろう。

アウトステーションの形成の中で彼らは定住的な居住形態をとらず、遊動（nomad）的である伝統を残し、食糧の確保や医療、教育、レクリエーションなど、必要に応じてアウトステーションとセツルメント間を動くことでセツルメントの機能をうまく利用している。しかし、近代設備のととのったまちの生活はやはり魅力的なもので東部アーネムランドのガリウィックではセツルメントに常住し、週末や休日にアウトステーションにでかけて狩猟採集生活を楽しむという人口の再集中があらわれている [杉藤・窪田 1987]。このような現象はアボリジニ社会が社会保障金と援助金によって現代の物質文化のうえで、伝統的な社会形態を適応させた近代狩猟民社会とでもよぶべき社会をつくりあげつつあるといえるだろう。

C. 社会の復興と芸術の意味

アウトステーション運動のなかから生まれた大きな成果の一つに現代アボリジニ芸術がある。アボリジニ社会の自立をめざす政府は農業、牧畜、製材、漁業などさまざまな産業振興プロジェクトを推進した。しかしそれはほぼ完全に失敗したといえる。最後に残ったのは美術工芸（Art and Craft）であった。中央砂漠ではパプニアの砂絵、アーナベラのろうけつ染、アーネムランドでは木皮画、彫刻などに代表されるアボリジニ芸術が独特な手法と鮮かな表現で注目をあつめている。また、女性たちの制作する編み物、小彫刻などは土産物としての販路をひろげている。美術工芸産業は彼らの現金収入源として全収入（ほとんどが社会保障金である）の約28%をしめることが報告されている [Altman 1987]。

しかし最も重要なことは美術工芸品は単なる商品ではなくほとんどが神話、伝承を背後にもつ彼らのドリーミングとよばれる宇宙観を表現する手段であることである。したがってそれは彼らの生活そのものや社会の存在自体につながっている。美術工芸品をつうじてアボリジニの生の哲学とでもいうべきドリーミングの概念が、アボリジニであることのアイデンティティを失ってしまっていた都市アボリジニにとり入れられ、誇りと希望をあたえる原因

になった。つまりドリーミングは1920年代に成立した混血アボリジニのポピュレーションをアボリジニ社会にひきつけ統一する役割をはたしたのである。これによってオーストラリア・アボリジニ社会は復興と再編へのたしかな道すじを発見したといえるであろう。

IV 異文化接触のかたち

異文化接触、すなわち二つ（以上）の文化が接触したときその結果はどうなるかは興味深い問題である。梅棹忠夫氏は諸文化要素の結合によってできあがっているシステムを「文明」とよんで、現代日本文明のなかで機能している和風、洋風、中国風という諸要素の統合様式を考え、折衷、習合、置換、並立の四つのかたちを考えている。しかし折衷、習合、置換は結局部分的な現象におわり、最終的には並立的共存すなわち「昔からの伝統的なものはそのまま存在し、あたらしく外からはいつてきたものもその居場所をあたえられる」にしばらくこまれるだろうとのべている〔梅棹 1981〕。ただしこの場合は日本という大きな安定度の高い文明が、中国や西洋の文明の文化要素を選択し利用するという力の均衡した文化接触のケースである。ところが一方が圧倒的に優勢である場合、つまり大航海時代以降のヨーロッパによる部族社会への伸長という近代史のなかでは、劣勢な側が「消滅」することはしばしばあった。しかし優勢な側へ吸収されてしまったとされる場合にもよく観察するとやはり並立的共存というかたちに終わっていることが観察される。

すでにのべたように本論文はこの問題をオーストラリア・アボリジニ社会を例にとって、人口という視点からとらえようとした。ある社会の人口量を文化（一定の行動や思考のパターン）を共有し支えている集団の力と考えると、オーストラリア・アボリジニも世界の他の民族の例、たとえばインカやアメリカインディアン社会でみられるように政治集団や純血の人種が滅亡したあとも、その地には征服者側の文化とは別種な文化が育っているという共通した現象に気がつくのである。

オーストラリア大陸は1788年、イギリスの植民地となった。これにより狩猟採集民であるオーストラリア・アボリジニ社会は崩壊に瀕した。しかし、その後の人口変化をみると1920年代から回復をみせはじめ、1950年代になると高い率での伸びがみられることをこれまでみてきた。その人口変動の様子は、世界各地での部族社会と白人との接触（white contact）の典型的なパターンをしめすことがわかる。

上昇にむかったオーストラリア・アボリジニ人口の動きをくわしく観察すると、1920年代からの増加はアボリジニ社会が完全に破壊された南部の都市部ではじまっている。それは白人との接触の結果形成された混血アボリジニ集団が膨張した結果であった。しかしこの集団はアボリジニとしてのアイデンティティがなく、しかも白人でもないという不明確な集団だった。一方、1950年代からは社会福祉の整備などによる政府の保護政策の成果によって、

伝統的社会の人口が増加していった。伝統的社会は1970年代初頭から自立へと動きはじめる。それは、セトルメントにほとんどの人口が集中して西洋化にむかっていた社会が伝統な社会へ回帰しようとした動きだった。そのような動きのなかで芸術・儀礼が振興され、ドリーミングというアボリジニ社会固有の観念が強くうちだされてたのである。

ドリーミングとはアボリジニという人種の形成、個人の生と死、社会や生活のあり方などを包括する観念である。このドリーミング思想によって、都市部の混血アボリジニ集団は自分たちがアボリジニ社会に属するというアイデンティティを確立する根拠をえた。その結果、混血アボリジニ集団と伝統的アボリジニ社会が結合され、アボリジニ文化を支える母体となる人口量をもったエスニックグループが形成され、新しい現代アボリジニ社会が成立したといえるであろう。したがって、今後のオーストラリアという国家におけるアボリジニ集団の消長は、これら二つのグループが一体化し、その集団サイズを増やしていけるかどうかにかかっていると考えられるのである。

《文 献》

- Altman, J. C. 1983 **Aborigines and Mining Royalties in the Northern Territory**, Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra.
- Birdsell, J. B. 1970 Local Group Composition among the Australian Aboriginies, **Current Anthropology**, 11: 11 5-142
- Coombs, H. C. 1978 **Kulinma: Listening to Aboriginal Australians**. Australian National University Press, Canberra.
- Jones, F. Lancaster 1970 **The Structure and Growth of Australia's Aboriginal Population**. Australian National University Press, Canberra.
- Jones, R. M. 1969 Fire-Stick Farming. **Australian Natural History** 16: 224-228.
- Kirk, R. L. 1981 **Aboriginal Man Adapting**. Oxford University Press, Oxford.
- 小山修三 1988 「オーストラリア・アボリジニ社会再編成の人口論的考察」『国立民族学博物館研究報告』11(1): 37-68
- マドック. K. (松本博之訳) 1986 『オーストラリアの原住民』(原題: The Australian Aborigines) 勁草書房.
- Meehan, B. & R. Jones 1980 The Outstation Movement and Hints of a White Backlash. In Jones, R. (ed.), **Northern Australia: Options and Implications**, Reserch School of Pacific Studies, pp. 131-157.
- Mulvaney, D. J. 1975 **The Prehistory of Australia** (Revised ed.). Pelican Books, London.
- Peterson, N. (ed.) 1981 **Aboriginal Land Rights: a Hand Book**. Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra.
- Radcliffe-Brown, A. R. 1930 Formal Numbers and Distribution of the Australian Aboriginies. **Australian Official Year Book**, No. 23, pp. 687-96.
- Rowly, C. D. 1970 **The Destruction of Aboriginal Society**, Pelican Books, London.
- 杉藤重信・窪田幸子 1986 「ウィークエンド・ハンター」『季刊民族学』36: 88-93.
- Tindale, N. B. 1960 Aboriginal Tribes of Australian. **Natural History** 16: 224-8.
- 梅棹忠夫 1981 「和と洋」『美意識と神さま』中央公論社 pp. 338-382.

Formation of Modern Aboriginal Population

Shuzo Koyama

(Assistant Professor, National Museum of Ethnology)

At the time of European settlement, it is estimated that there were about 250,000 aborigines in Australia. The decline of Aboriginal population began immediately after the contact and destruction continued such that the whole population was in danger of extinction in less than 100 years. The recovery of the population started after 1920 as the commonwealth government took up the "protection" policy. The rate of recovery of the Aboriginal population was surprisingly rapid which was due mainly to a growth in the population of mixed descent, particularly in urban area. However, population among the remote area started to recover much later; after mid 1940's. Since early 1970's the Australian government changed its policy toward Aborigines from "assimilation" to "self-determination" by strengthening the social welfare system. As a result, the ideology of pan-aboriginality developed and merged two different populations as an ethnic group. Many people of mixed descent reasserted their Aboriginal identity. This paper tries to overview the history of Aboriginal population and discusses the problems occurred in the course and its future.